

ミラノサローネ レポート

西村美由紀 写真:日根伸夫

◆サローネ50周年

2015年のEXPOに向けてか、数年前から始まった建設工事があちこちで続くミラノで、今年も例年通り4月に、ミラノ国際家具見本市、通称サローネが開催された。

特に今年はイタリア国家統一150周年であり、サローネ50周年という節目でもあった。

このサローネ、本来はフィエラと呼ばれる見本市会場で行われる家具見本市のことであるが、10数年前に雑誌「INTERNI」が、サローネの時期に見本市会場外、つまりミラノ市内各所で行われるイベントのガイドブック「フオリ(外の意)サローネ」を出すようになって以来、これらイベントのことをフオリサローネと呼ぶようになり、日本ではサローネといえばフオリサローネを含んだ名称のようにも使われている。

ここ数年のサローネはインテリア業界の見本市というより、そのフオリサローネも含め一般の人やミラノ市も巻き込んだデザインイベントとなり、サローネの行われる時期をミラノデザインウィークと呼ばれるようになった。

リーマンショック以降の不況時も来場者は増え続け……

そんなサローネも今年の入場者は32万人強、かなりの人数ではあるが昨年に比べればやや減少気味(-4%)。

やはり長引く不況の影響は避けられないのか、イタリア国内からは出展も入場もかなり減少した。逆に、国外からの入場者の割合はどんどん増え続け(63%)、一般入場者も増えている。このことは、いくら不況とはいえサローネの影響力はますます広範囲になり、すそ野が広がっているということだろう。

ちなみにサローネを主催するCOSMITが今年のテーマを“50 Years young”と掲げたのは、50歳になって益々盛んに発展し成長することを意味している。

サローネに出展している企業も、今年は規模や会場構成こそ地味になったが、各社とも自社の強みのアピールに趣向を凝らしている。一時の観光イベント化した頃より、デザインを真剣に考え直すという意味からも、今年は節目だったに違いない。

フィエラでは、「モダン」家具パビリオンが減り「デザイン」家具パビリオンが拡張しているのも、その現れだろう。増え続ける中国人来場者とは対照的にだんだん影が薄くなった感のある日本人、更に3月の大震災の影響で、出展や視察を控えたところも多いと聞かすが、そんな日本を応援する企業やイベントも多かった。

世界各地からの個性あふれるデザイナーを起用するMorosoは、その製品化のために新技術や新素材の開発にも熱心である。

今や、いくつのメーカーから新製品を出しているか分からないくらい売れっ子のPatricia Urquiolaも10年来Morosoから新製品を発表し続けている。Biknitはその名の通りニット素材をニットの形に編んだ張り地のチェアで、ミクロ的にもマクロ的にも両方の意味でニットだ。通気性が良く屋外でも使用できる。ボタンとキルティングのアプリケーションのついたシステムソファButton Downはテキスタイルデザイナー出身のEdward Van Vlietによる。

NendoデザインのローテーブルPondは池に映った自分の姿に恋してしまったナルシスの伝説がベースにある。



↑市内各所で見えるCOSMITの旗



↑FIAT500がイタリア色のソファに/ Meritalia



Morosoのスタンドは毎年その会場構成を見るのも楽しみであるのだが……今年は少々質素。



↑Biknit: デザインPatricia Urquiola /Moroso



↑Pond: デザインNendo/ Moroso

新製品だけでなく歴代の代表作を並べて展示するのが恒例のKartellであるが、今年はタイトル別に展示。スタンド入口正面の“Kartell the DESIGN ICONS”には、文字通りKartellのアイコンともいえる代表作が並ぶ。“Wonder Wheels”には、イタリアンカジュアル家具といえばキャスター付き、といった時代を思い起こさせる家具たち、“We Love Red”にはブランドのシンボルカラー赤い製品、“Ghost Goods”にはモダンの印ともなった透明家具、などそのタイトルがいかにKartellらしい。

新製品は“The New Kartell Stars”と題され、スタルクや吉岡徳人の作品が並ぶ。吉岡徳人のチェアとコンソールテーブル”The Invisibles Lightは勿論透明で、このところの彼の作品は人が形を作ることを拒否しているようである。

毎年いろいろな素材を使って新製品を発表するEdraであるが、その意外な使い方は普通ではない。昨年はヤシの繊維を不燃処理しボサボサ頭のようなシェルフを発表したが(今年もその第2弾あり)今年、ややおとなしく、展示テーマはEdra in Wonderland。木のような形の無垢板の扉のPaesaggi Italiani(イタリアの風景)というシリーズの中のシェルフが会場を囲み、その中に動物のように一枚革で作られたチェアや、カラー樹脂製の照明入りチェアAliceが並ぶ。

ユニークな屋外家具で知られるDedonの今年の新製品は何と言ってもNestrest。3人ほどは十分に入れる巨大な鳥の巣のようである。スタンドの背景には各大陸からのさまざまな人種の人々が描かれており、アフリカやアジアからの来場者が目立った今年のサローネを象徴するようでもあった。



↑Kartellの代表作が並ぶ



↑Paesaggi Italiani: デザインMassimo MorozziとFrancesco Binfare / Edra



↑Nestrest: 吊り下げ型とスタンド型がある。デザインDaniel Pouzet と Fred Frety / Dedon

◆今年のトレンド

冒険する余裕がないためか、今年も有名デザイナーに新製品が集中する傾向が強かった。

一方、素材としてはあらゆるものが見直され新しい使い方の模索がなされている。木製板材は、その素朴さを強調するように木目を目立たせた仕上げ(昨年はスタンドの床や壁面に内装材として多用された)が多く、樹種は針葉樹系が多様され、中には白っぽく塗装して優しさを強調するなどの試みも見られた。

陶器は、素朴な素焼きや昨年流行った淡い色ばかりでなく、鮮やかで光沢のある釉薬をつけたものも登場。

金属や革を、力強く素朴な感覚で使ったり、大理石を象嵌など繊細な加工で使うなど様々である。

プラスチックはじめ、異素材の組み合わせもさまざま。イメージのかけ離れた素材同士の、いわゆるミスマッチ感覚も随所に見られた。

色では、数年来続いている穏やかなアースカラーや素材そのものの色がやはり主流で、穏やかなブルーグレーも根強い人気だ。さらに、今年よく見たのは優しい白。

一番目だったのは、今まで抑えてきたものを一気に発散させるかのようなカラフルな色の組み合わせ。

装飾エレメントとしては、昨年いたるところに見られた丸太はすっかり減り、今年には生け花と苔と白い玉砂利。

盆栽はイタリアにすっかり根をおろしたが、現在は生け花が大流行。苔もよく使われている。



↑Riva 1920は昨年からTra le bricole di Veneziaと題しベネツィアの杭の廃材を使った家具を作る。



↑Il Giullare: 道化師というカラフルなソファ。これに座るとみんな笑顔になる。デザインGaetano Pesce / Meritalia



↑今年も大流行。/Ligne Roset

◆ユーロルーチェ EuroLuce

奇数年にミラノ国際家具見本市に併催されるユーロルーチェは、ヨーロッパの国際照明見本市としては、偶数年にフランクフルトで開催されるライトアンドビルディングlight+buildingと交互の開催となる。

ライトアンドビルディングが光源や照明技術などどちらかといえばハードに強いメーカーが出展するのに比べ、ユーロルーチェは照明器具デザイン、つまりスタンドやペンダントといったインテリアエレメントとしての器具を製造するメーカーが中心となる。

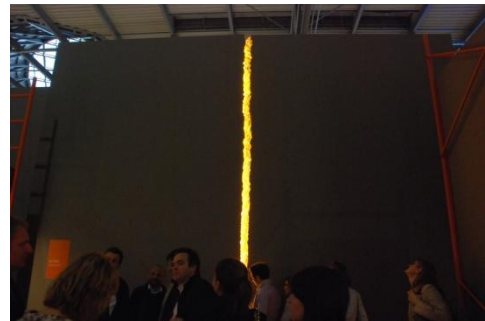
前回、すなわち2009年は、白熱普通球クリアランプの使用を、2010年あるいは2012年までに禁止するという法案が決まって間もない時期であったため、その法案に抗議を表明するメーカーや、慌ててLEDを取り入れるメーカーなど様々であったが、今年は適度にLEDも取り入れながらハロゲンランプにシフトするところが多かった。昨年のライトアンドビルディングでは随分LEDの性能が進化し、新製品全部LEDというメーカーや、更に新光源として注目されている有機ELを使った器具を参考出品するメーカーなど新光源の使い方が目立ったが、今年のユーロルーチェでは、LEDでもハロゲンでもデザインが良ければどちらでもいいというスタンスである。

また今年も、白熱灯禁止令を撤廃せよ、と抗議し続けているところもある。

施設用などを得意とする大規模メーカーや技術系メーカーの中には、ライトアンドビルディングに集約するためか今年のユーロルーチェに出展していないところもいくつかあったが、そういう点からも、ユーロルーチェはますます照明器具デザインに特化してきたと言える。

LEDの普及と共に増えたのが反射板タイプというか間接光の器具。眩しさを嫌うヨーロッパでは鋭い強い光が直接見える器具は少ない。このタイプの器具はLEDばかりではなく同デザインでハロゲンランプ仕様が揃っているケースもある。昨年のフオリサローネでソフトアーキテチャーという建築化照明群を発表したFlos。今年も更に充実し、壁が裂けたようなWallruptureが目を引いていた。

更にスタンドでは、漆色の木製トレイ付き、あるいは石、あるいは棚といった三種類があるPianiが楽しい。ボックスで取り付けるブラケットのシリーズや、従来のキャンドル型ブラケットを究極にまでシンプルにしたLED器具La Lineaなどバラエティ豊かな新製品群である。



↑Wallrupture: デザインThierry Dreyfus/ Flos



↑La Lineaの2灯タイプ。Ron Gilad デザイン/ Flos

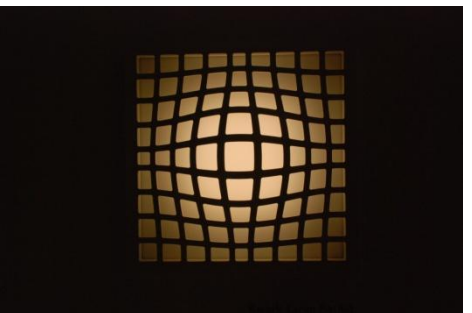


↑間接光のブラケット。/ Artemide



↑見事に計算された影を持つ。/ Catellani & Smith

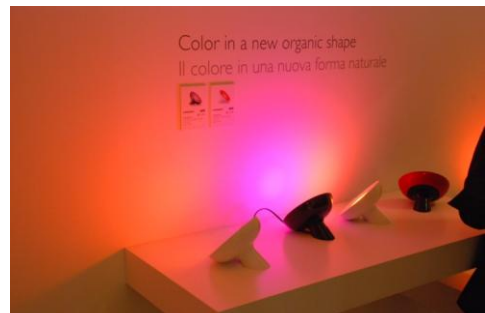
昨年のライトアンドビルディングから、住宅照明に本格参入してきたPhilipsは、ユーロルーチェではホームユースに集中。住宅における調光システム、調色やカラー調光を提案。住宅というよりパーソナルカラー照明の提案だ。光源メーカーや技術系メーカーが効率や光の質を研究するのと同様、デザイン系メーカーはいかに新鮮な形状や光の効果を表現できるかにかける。便利さや効率ばかりの発想ではとても商品化できない器具も多い。間接光やシルエットを利用した器具が多いのも光源が小さくなってきてからの傾向だ。



↑KvarK: 四角い面セードではなく中はLEDの反射光。デザイン Karim Rashid/ Fabbian



↑星型の先は磁石で、それぞれの灯具が少し近づくピタッとくっつく。/ Nemo



↑パーソナルカラー調光ライティングの提案。/ Philips

◆フオリサローネ FuoriSalone

今年も、INTERNIの冊子に掲載されているだけでも400件を超える市内イベント。

まずは2008年から毎年ミラノ大学で行われているINTERNI主催のイベント群へ。何組もの著名建築家、デザイナーがメーカーと組んで作品を制作する。毎年テーマは新しくなるがエコロジーがベースにあることは変わらない。

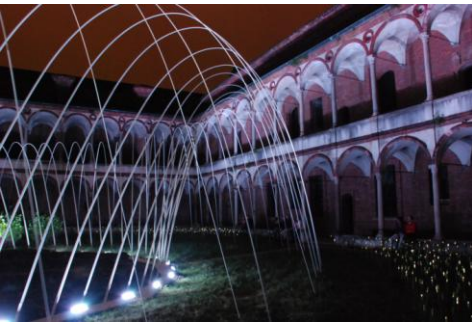
今年のテーマは**Mutant Architecture & Design**、つまり時代や場所を問わず利用可能、流動的で再利用も可能な建築デザイン。初回が**Greenerydesign**だったのに比べると

テーマも複雑になってきた。この会場は夜の12時まで開いているが、いつ行っても、学生やら家族連れ、友達同士が作品見学が散歩のついでか、作品に座ったり寝そべったりしてのんびり歓談しているのどかである。

その内の一つにMichele de Lucchiの作品Pensando L' Aquila(アクイラを思って)がある。メーカーはRiva1920、この会場の石のアーチの一部分を木で補強したもので、施工は消防署が担当した。



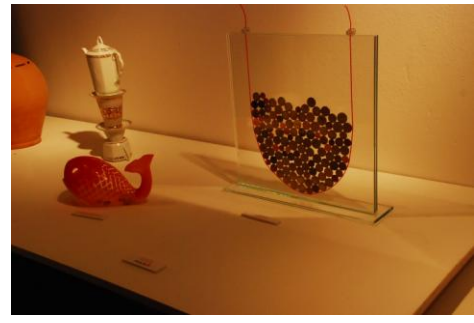
↑ミラノ大学に設置されたPensando L' aquila: デザインMichele de Lucchi/ Riva1920



↑80本のファイバーによるSuspended Colors. 右端に光るのはリップスティック Gwenael Nicolas/ Deborah Milano



↑小さな虫がせっせとコインを頂上の穴へ運ぶ。/ Charity Box



↑2枚のガラスの間にコインを入れていくのが楽しい。/ Charity Box

3月11日以降といえばサローネ直前、ミラノ周辺のデザイナーにとっては最も忙しい時期である。日本人のみならず日本をよく知るデザイナーたちは、何か日本の役に立つことがしたいと思いつつ悶々としていたところ、菰田さんというデザイナーが日本支援のチャリティーボックス作品展を呼び掛けた。すぐさま参加表明したデザイナーは50名を超える。この作品展はフオリサローネガイドにも載っていないけれど、ロコミで多くの入場者が集まり、手に手に財布をもって作品の間を歩き来する人々で賑わった。

運河近くのトルトナ地区はかつて工場や倉庫の密集地だったが、空いた倉庫をファッション関係のスタジオとして使うようになって以来、だんだんイベント会場ようになってしまったエリアだ。サローネ期間、ミラノ市内あらゆるところでイベントは開かれているが、このトルトナ地区もイベント密集地帯のひとつである。

今年も日本からは東芝やCANON、カネカなどの企業がインスタレーションを行っていたが、各国からは企業の他、若手デザイナー集団やデザイン学校の作品展など様々なイベントが行われていた。

例年は、夕刻ともなると続々人が集まり殆どお祭り状態で、道を歩くのも困難なほどごった返すが、今年の人出はそれほどでもなく安心して歩けた。

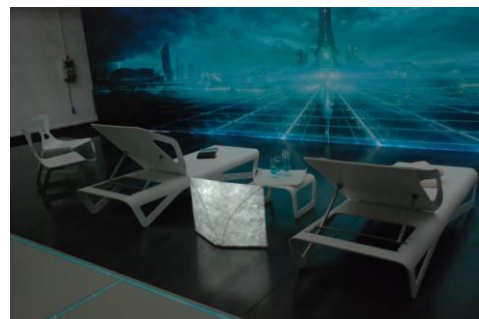


↑ Academy Duck: 水に濡れてもいいプラスチックシューズとお風呂アヒルは水仲間? -Head Geneve+melissa



↑Mendini+Bisazza

トリエンナーレ会場で行われたイベントの一つに、Alessandro Mendiniと、モザイクタイルメーカーBisazzaによる作品展がある。1989年以来20年以上にわたるコラボレーションを記念して行われた作品展はとても幻想的。彼らが、それまで限られた用途の建築材料だったモザイクタイルを創造性に満ちた材料にしたのだった。



↑トロン:レガシーの世界/ Dupont-corian